

心に寄り添う認知症ケア ～市立病院認知症ケアチームの活動～



▲患者さんの様子を伺う菱澤 医師
(糖尿病代謝内科・認知症サポート医)

超高齢社会が進み、2040年には約1,200万人が認知症やその予備軍になると予測されています。今や認知症は、誰もが直面する身近なテーマです。

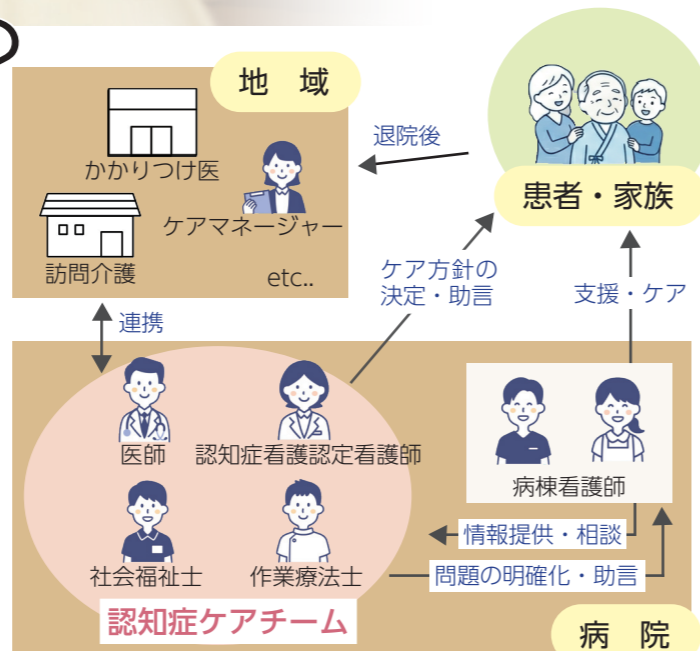
彦根市立病院では、病气や怪我で入院した認知症の方が、安心してぬくもりのある医療を受けられるよう、2017年に「認知症ケアチーム」を結成しました。活動10年目を迎えるチームの取り組みを紹介します。

問 市立病院 認知症ケアチーム
☎ 22-6050 FAX 26-0754

認知症ケアチームとは？

入院に不安を抱えた認知症患者やご家族を支える、医師・認知症看護認定看護師・社会福祉士・作業療法士のメンバーからなる多職種チームです。メンバーがそれぞれの視点を持ち寄って、患者さんの生活歴や検査データ、入院中の様子を多角的に分析し、一人ひとりの患者さんにとっての最善のケアを病棟スタッフと共に考えます。

また、身体を縛らないケアの推進や、院内外での研修にも注力しています。専門知識と連携の力で、入院中の不安を安心へと変え、スムーズな治療と早期退院をサポートしています。



▲認知症ケアチームの役割



▲患者さんの情報を共有し、意見を出し合います



▲毎週患者さんのもとに伺い、患者さんの状態やケアの状況を確認します

interview 発定時からチームに関わる、金子医師、藤井看護師にお話を聞きました。

「その人らしさ」を守る医療へ
入院現場の新しい常識

♡ 入院を機に現れる「不安」に寄り添う

金子医師：急性期病院である当院では、患者さんは肺炎や心不全といった身体の病气やケガの治療を目的として入院されます。しかし、認知症の方にとって入院という環境の変化は想像以上のストレス。入院を機に認知症の症状が悪化したり、混乱して「せん妄」を起こしたりするケースは大きな課題でした。現場の看護師だけで対応するには限界があります。そこで専門知識を持つチームが介入し、現場の負担を減らしながらケアの質を向上させるため活動しています。

Q. チームが関わるようになって変わったことは

金子医師：かつては、混乱して自ら点滴を抜いたりする危険を防ぐため、患者の手足を固定するなどの身体拘束は安全管理上やむを得ないという空気がありました。しかしそれは人権に関わる問題です。チームが介入し、現場の認識を変えることで拘束に頼らない看護へシフトしてきました。

藤井看護師：大切なのは「なぜその行動をするのか」を考えることです。「痛いのか」「トイレに行きたいのか」。その原因をケアで取り除きます。患者さんの様子に気付けるよう、当院では、看護師ができるだけ病室内に留まる「セル看護提供方式®」を導入しており、患者さんには、誰かがそばにいる安心を感じていただけます。

♡ 一人の人間として尊重し、安心感を

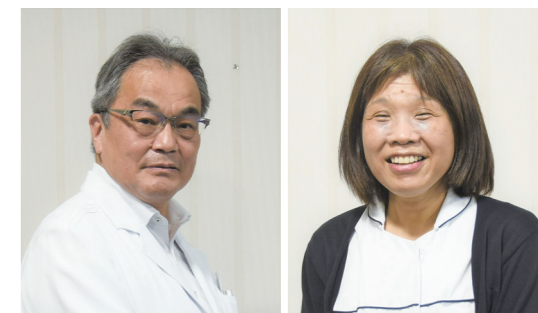
Q. 入院中に大切にしていることは

藤井看護師：入院したからといって、これまでの習慣を中断させないことです。本を読んだり絵を描いたり、少しでも入院前の生活と同じことができるようお手伝いしています。また、ご家族の不安や、現場の困りごとを即座に共有して対応方針を決めています。

認知症の方は、自分の失敗に深く傷ついていることもあります。まずは目を合わせて挨拶をする。そんな「一人の人間として大切にされている」という安心感を持ってもらうことが、何よりのケアになります。

Q. 市民の皆さんへ伝えたいことは

金子医師：私たちの活動は、身体の病気をしっかり治して、元いた場所に戻っていただくことを目的としています。その後は家庭や地域で、認知症の方を孤立させないことが重要です。認知症の方を地域社会全体で支え、見守るコミュニティを地域の皆さんと共に作っていただければと願っています。



認知症サポート医
彦根市病院事業管理者
金子 医師

老人看護専門看護師
認知症看護認定看護師
藤井 看護師

information



認知症ケアチームでは、患者、ご家族、介護者に寄り添うガイドブックを作成しています。ぜひご自宅でのケアや、地域での認知症ケア活動にお役立てください。

- 食 事
- ケアの ポイント
- 進行 予防
- 排 泄

こちらから
ダウンロードできます▶

